

スピンオフ クリスマスの惨劇、愛佳の決意

開いた口が塞がらないとはこのことだと、和泉陽花は思った。

「所長！ もう一度確認してほしいです。本当に彼を採用する気なんですか!？」

ここは弁護士のと泉が所属する天羽法律事務所の所長室。

応接セットのソファに深く身を沈めた所長の天羽隆盛は、灰色のフランネルスーツ姿で、妻が編んだというグリーンの毛糸のセーターも着こんでいる。

背はそれほど高いわけではなく、和泉よりも低い。スーツの左襟には弁護士バッジを付けていないので、弁護士らしさはまるでなく、すでに隠居した身のように見える。

顔に刻まれたしわには長年の労苦が感じられ、オールバックの髪は真っ白だ。

ただ、目は鋭く光り、長年様々な事件と向き合ってきた深みが感じられた。

そんな眼差しがこの人が耄碌したのだろうか、と和泉はまじまじと覗き込む。

「和泉さん、そんな怖い顔をしないでくれんかのう。もしや、わしが呆けたとも思ったのかね?」

「失礼ながら、所長のご決断は、ちょっと……その……」

「ご決断なんて大げさじゃよ。わしは彼を面接した時から、彼を採用しようと決めておつた」

「所長、彼のフルネームをもう一度おっしゃっていただいてよろしいですか？」

和泉の尋問に天羽は苦笑する。

「まるで証言台に立たされた気分じゃよ。和泉さん。いいかね、わしは『村正悠也君』をこの事務所の新しいメンバーとして迎え入れようと思う」

村正悠也、とはつきり発音したので、和泉は思わずため息を漏らした。

「……所長。彼の面接での発言をもう一度、振り返ってよろしいでしょうか？」

「何度でも振り返るがよろう」

和泉は応募者の情報が記載されたファイルを開いて、村正の情報が記されたページを探す。和泉が天羽と一緒に村正の面接をした時に、彼の発言を聞き取ってまとめたメモが挟まれていた。

「消費者問題とはどんな問題か知っていますか？ この質問に彼は何と答えたか覚えていますよね」

「知らん」

「知らんとは？」

「村正君が『知らない』と答えたという意味じゃよ」

「そうです。次に、消費者法、特定商取引法、割賦販売法、この3つの法律がどういう法律か説明してください。この質問に彼は何と答えましたか？」

「村正君は『知らない』と答えた」

「そうです。実にきつぱりと答えたので驚きました。うちの事務所の募集案内には、消費者問題に力を入れていると明記してあるにも関わらずです」

「うむ。単純明快でよろしい。弁護士には本当は知らないのに知ったかぶりをして適當なことを言う者もいるが、潔く知らないと言えるのはよいことだと思うぞ」

「知らないことをはっきりと知らないと言つ勇氣は認めますが……。募集要項は目を通して、面接で聞かれることを想定して予習くらいするのが礼儀ではないでしょうか？」

「消費者3法は司法試験科目ではないし、法学部でも選択科目だから受講しなくてもよい大学がほとんどじゃろう？ 付け焼刃の知識で適當なことを言うよりもよいとわしは思うぞ。うちの事務所に入ってから勉強すればよいのじゃ」

彼に私が教えるということかと……と、和泉は深いため息を漏らしながら言葉を続ける。

『それから次に、弁護士としての適性の質問です。』

『お金持ちの老人がいますが、彼には法定相続人がいません。彼が亡くなったら財産はす

べて国庫に帰属します。彼がクライアントだったら、あなたはどのような提案をしますか?』この質問に対して彼は何と答えたか覚えていますよね?」

「もちろんじゃよ。村正君は『全部、俺にちょうだいと言います』と答えた」

「そうです。実に由々しき回答です」

「実に正直でよろしい」

間髪を入れず、和泉は身を乗り出した。

「所長、これは問題発言ですよ。こんな考え方の彼を採用したら問題を起こしかねません!」

「どうしてかね? 国庫に帰属してしまうくらいなら、『全部、俺にちょうだい』と言うのはごく自然ではないかな?」

「彼は、横領する気満々です。弁護士なら後見人の利益になる遺言は無効とされている民法966条を踏まえて、遺贈寄付の方法について提案するとかですね……」

和泉の言葉を天羽は手を挙げて制する。

「和泉さん、よいかね。遺贈寄付を提案するなんていう偽善者こそ、わしは信用できません。そんな弁護士こそ、遺言を書き換えさせたり、偽造して、最終的に自分の懐に財産が転がり込むように仕向けるんじゃないよ。村正君なら、老人を熱心に世話をしたりして、それ

こそ、病院とかにも付き添ってだな、『俺にちようだい』とおねだりするだろうな。実によいじゃないか。そんな彼になら、全財産を譲ろうと思つものじゃよ」

「仮に所長がその老人の立場だったら、彼に全財産を譲るんですか？」

「もちろん、村正君が欲しいと言え、譲るのう。負担付死因贈与契約を結んで、相応のことはやつてもらふがのう」

不承不承ながら、そういう考え方もあるのかなと、和泉は黙り込んでしまう。

「では分かつてもらえたかね？」

「まだ話は終わっていません。そうですね……私も彼の良い所を頑張つて探しました」
和泉はファイルのページをめくつて村正の履歴書を開く。

「続けて」

「まず、彼は予備試験組であることです。国立京葉大学法学部の4年生の時に司法試験予備試験に合格しています。そして、大学を卒業した年に司法試験本試験に合格しています。京葉大学法学部が中堅レベルであることを考えれば実に素晴らしいです。彼は相当努力したと思います」

「……いや、努力というよりは素質じゃろうな」

「そして、ストレートで司法試験に合格したことから、今回、うちの事務所に応募してき

た10名の中で最年少です」

「年齢など気にしておらんよ。もちろん、わしみたいな爺では困るがな」

「所長。彼の良い所はこの2点だけです！ 面接での受け答えはまるでなっていないし、やる気が感じられません！」

「ああ。この際、全部吐き出してしまいなさい」

和泉はイラッとしながら、メモをもう一度開く。勢いよく開いたので村正の履歴書がちぎれ落ちそうになった。

「司法試験を目指したきっかけは何ですか？

この質問に対する答えは、『就職活動をしたくなかったから』。

弁護士を目指したきっかけは何ですか？

この質問に対する答えは、『ゲームの逆転弁護をプレイして超爽快だったから』。

将来どんな弁護士になりたいですか？

この質問に対する答えは、『特にないっす。金が稼げればなんでもいいっす』。

——ふざけてるんですか！——

天羽の快活な笑い声が室内に響いた。

「実に正直でよいじゃないか。弁護士になろうとする今どきの若者の本音は大抵そんなも

のじゃよ」

「所長！ お言葉ですが、私は……！」

自分が学生時代からいかに高い志を持っていたかを力説しようとしたところで、和泉は天羽に遮られた。

「分かっておる。和泉さんのように志の高い人もいることはな。じゃが、わしは和泉さんが熱心すぎることに危惧しておる」

急に何の話が始めるのかと和泉は首を傾げた。

「私が熱心すぎる……とは？」

「紫雲女子大学消費者センターの顧問をしていることじゃよ」

「元部長ですし、今は顧問として後輩の活動をサポートするのは当然と思っていますが」

「それがよくなかったのではないかと思っておる」

「ど、どういことですか……？」

紫雲女子大学消費者センターは、学生のサークル活動であるが、消費者問題に力を入れている天羽法律事務所がバックアップしているので、地方自治体の消費生活センターに引けを取らない体制となっている。

和泉も紫雲女子大学法学部法律学科に入学した時から、センターの活動に参加した。

当時の顧問は、天羽隆盛の妻である天羽政子。彼女は弁護士ではないものの市役所で消費生活相談員として長く勤めていたので、その豊富な経験と知識を以て、和泉たちをよくサポートしてくれた。

和泉は司法修習を終えた後、天羽法律事務所に入所し、政子から顧問の座を引き継いだのだ。以来、後輩たちの面倒をよく見てきたつもりだった。

「わしは、和泉さんの活動を否定するつもりはない。最大の賛辞を送りたい」

「ありがとうございます。では何が問題なんですか？」

「和泉さんの立場じゃよ。和泉さんがあの大学のOGであるという点じゃ。しかも学生との年齢が近すぎる」

「はあ……？」

「学生たちの輪に入って仲良くするのは良い。だがそれでは、センターの部長が実質、和泉さんのような状態になってしまうし、先輩である和泉さんに甘えてしまう。学生の主体性が育たんのじゃよ」

天羽の指摘に和泉は息を呑んだ。

言われてみれば、そのとおりかもしれないと思ったのだ。

歴代の部長は、今も様々な業界でリーダーシップを発揮し、第一人者として活躍してい

る。しかし、和泉が顧問を務めている期間に部長だった面々は、先輩たちに比べると突出した成果を挙げるには至っていないと言わざるを得なかった。

「……私が出しゃばり過ぎたということですか？」

「そうは言っておらん。和泉さんは自制していたと思う。学生のアドバイスが間違ってもその場では否定せず、あとで教えていたのであるう」

「致命的な間違いでない限り、そうしてきました」

「そうじゃ。和泉さんのやってきたことは間違いではない。だが、年齢が近い先輩が顧問に就くのは良くないということに、わしも気づいた」

「では、私はセンターの顧問を引退せよと？」

「お疲れじゃった。今までよくやってくれた。そして、次の顧問には村正君を送り込む」
「そんな……所長！ 彼は消費者問題について何も知らないんですよ!？」

「それでよい。顧問が何も知らなければ、甘えることなく、学生自ら調べて解決しようとする。幸い、新しい部長の神前愛佳さんだっけ？ 彼女は優秀なのじゃろう」

「ええ、優秀ですが……。彼女にもすごい負担がかかってしまいますよ……」

「彼女の負担を心配するより、和泉さんは自分の負担を心配してくれませんか？」

「厄介な仕事が舞い込んだのですか？」

「そうではない」

天羽はソファから立ち上がると、自分の机に足を向ける。

和泉も後に続くと、天羽の机には、一冊のファイルが置かれていた。

ファイルを開いた天羽が一枚の紙切れを和泉に差し出した。

辞令――。

「本日より、我が天羽法律事務所所長代行に和泉さんを任じる」

「はああつ？ 私が所長代行ってどういうことですか？」

「団塊の世代のわしも、後期高齢者になった」

「は、はい。あの……おめでとうございます」

「そう。めでたいことじゃ。これを潮にわしは一線を退いて、非常勤になる。この部屋も和泉さんに明け渡す。引き継ぎすべきことはすべてこのファイルにまとめておいた」

「そんな！ 突然過ぎます！ それに次の所長は、志道さんじゃないんですか？」

「志道さんは最初から所長になりたくないと言っておった。彼がやりたいと言っていれば、とつくに譲っておるよ」

「だからと言って、いきなり私に所長代行をやれって……」

「君はわしの教え子、直弟子じゃ。君に引き継がせたいと思っていたし、君ならやれると

確信しておる。後は頼むぞ。村正君のこともよろしくな」

そう言うのと、天羽は机に置かれた【所長 弁護士 天羽隆盛】の古ぼけたネームプレートを取り去り、代わりに【所長代行 弁護士 和泉陽花】と書かれた金色のネームプレートをポンと置いた。

いつの間にそんな物を用意していたのかと、和泉は愕然とした。

時代劇の主題歌を鼻歌で歌いながら去る天羽の背を見送り、和泉は肩の凝りが酷くなったように感じた。

事務所の所長代行――、そして役に立ちそうもない新人弁護士の教育……。

この二つの難題が双肩にのしかかったのだ。



「今日は、みんな赤色コーデで揃っちゃいましたわね！　なんて偶然でしょう！」

芽森琴音の指摘に神前愛佳は、思わず、赤いパーカーのフードを被ってテーブルに伏せた。

琴音は、赤いワンピースに赤いサンタ帽を被っている。琴音の横に控える白砂菜月は、

濃紺のジーパンに赤いセーター。おまけに琴音にもらった赤いサンタ帽も被っている。

そして、自分のファッションはというと、赤いパーカー。

穴があつたら入りたいとはこのことだ。

「恥ずかしいわ。何でもんな、赤い服を着てくるの？」

「私は気にしないけどね。というか、愛佳だって、普段は地味なのに、今日はどうして赤いパーカーなんか着てるの？」

菜月が苦笑しながらフードを脱がそうとするので、愛佳は両手でフードをしっかり押さえる。

「私はあまり洋服を持ってないのよ。今日は寒いから、一番暖かいこのパーカーを着てきただけなの！ クリスマスとか関係ないんだからね！」

「はあ、ツンデレ？ 素直じゃないなあ、愛佳は」

「クリスマスなんだから楽しめばいいんですわ。もしかしたら、和泉先輩も、サンタコスプレでいらっしゃるかもしれませんわ」

琴音がくすつと微笑みながら、愛佳の分の赤いサンタ帽を差し出す。

「そんなわけ無いでしょ。それより、和泉先輩が部屋に入った瞬間の反応が怖いわ。なんて思っただろう」

「和泉先輩なら、『あら、かわいいいわね』で終わりだよ」

菜月が手を退けたので、愛佳はようやく身を起こした。しかし、サンタ帽を被ることは頑なに拒否する。

大型の楕円テーブルには、クリスマスケーキの箱が置かれている。その箱には、誰もが知るケーキの名店のロゴが刻印されていた。

「お父様が用意してくれましたの！ 1ピース5000円ですって。きちんと人数分、4ピース入っていますわ」

琴音がこともなげに言う。琴音の父親はホテル事業を初めとする様々なビジネスを手掛けている実業家なのだ。

「——はあ!? 1ピース5000円？ うちの寿司十貫よりも高いじゃん！」
そう目を丸くした菜月は、実家が東京の下町にあり、寿司屋を営んでいる。

新潟の田舎の平凡な公務員家庭で育った愛佳にとっては、ケーキも寿司屋の寿司も特別な時だけに食べられるもの。

「5000円って、1ホールの大きいケーキのことよね？ それもかなり豪華な……」
愛佳が琴音に顔を向けると、琴音は余裕たつぷりの表情でチツチツと指を振る。

「違いますわ。1ピースの値段ですの。大きいケーキを切り分けた一切れのお値段ですわ

ね」

「ええっ！ 一切れで5000円もするの!? 4切れってことは、20000円!？」

愛佳も目を丸くすると、琴音が不思議そうに首を傾げる。

「そんなにびっくりする愛佳ちゃんは初めて見ますわ。ケーキって大体、それくらいのお値段でしょ？」

琴音が菜月に賛同を求めようとすると、菜月は首を横に振る。

「私もそんな高級なケーキは食べたことないよ」

「やっぱり、琴音ちゃんは、私達と金銭感覚が違うのね。普通のお店は一切れで5000円くらいなのよ」

愛佳がため息を漏らすと、今度は琴音が目を丸くする。

「一切れで5000円ってどんなケーキですか？」

「今の時期、コンビニに行けば、ケーキが並んでいるでしょ。値札見ればわかるじゃない」

「そういうば、並んでいたような気がしますけど……、お買い物する時、お値段を確かめることがあまりなくて……。今度見てみますわ」

「でも、こんな高級なケーキ、私達が食べていいわけ？」

「もちろんですわ。愛佳ちゃんの合格祝いも兼ねていますしね。和泉先輩がいらしたら、一緒に食べましょ」

「みんな、こんにちは——。あら、かわいいわね」

そう言いながら入ってきた和泉は、いつも通り、ブラックのスーツ姿だった。左襟には金色の弁護士バッジが輝く。

愛佳は和泉の言葉に頬を火照らせながら、立ち上がって挨拶を返した。琴音と菜月も習う。

「ああ、今日はクリスマスなのよね。この頃、忙しくて忘れていたわ……」

和泉の目にクマが浮かんでいるような気がしたが、愛佳はひとまず、報告すべきことを言おうと、フードを脱ぐと一歩前に出る。

「あの、和泉先輩、報告があります」

「あら、私からも大切なお知らせがあるけど……、愛佳ちゃんから言っていいいわ」

「は、はい。——私、司法試験予備試験の論文式試験に合格しました!」

「おめでとう! 予備試験合格はすごいわ!」

「いえ、まだ口述試験があるので、気を引き締めたいと思います」

「そうね。□述試験は9割方合格できるけど、気を緩めてはいけないわね。1月だっけ。頑張ってるね」

「はい。頑張ります!」

愛佳が和泉と握手を交わしている間、琴音は怪訝そうな目を和泉に向ける。入ってきた時から、笑顔がぎこちないような気がしたのだ。

「あの、和泉先輩。大切なお知らせって何ですか?」

菜月もそう悟ったらしい。

「なんか嫌な予感がするんですけど……」

愛佳も二人の言葉に、和泉がいつもと違うことによく気づいた。

和泉が顔を曇らせた。

「あのね。私は、本日限りでセンターの顧問を退任することになったの……」

「ええっ——!!」

愛佳、琴音、菜月三人の悲鳴が重なった。

「ど、どうしてですか……」

そう呟いた琴音は、□を押さえて、涙をこぼしそうになっている。

「ち、ちよっと、琴音ちゃん、泣かないでね。私にとっては、そうね……喜ぶべきことな

のよ。出世したから……！ 最近、所長代行になったの……」

「お、おめでとうございます……」

愛佳、琴音、菜月がバラバラにお祝いを言う。

「あの脳天気な所長のおかげで、最悪な年末よ……！ あ、今のは失言だわ。所長は後期高齢者になったから、ちょっとお休みしたいというのね。仕方なく、私が所長代行になったわけ。私は事務所の仕事に専念しないといけなくなってしまったから、今日から天羽法律事務所の新人弁護士がセンターの顧問になります」

和泉の言葉に愛佳は、直接知る先輩に弁護士になった人がいたかなと考え込んだが、思いつかばなかった。

「村正君、こっち来て！」

和泉が廊下に出ると、声かけたが、応じるものはいない。

「あら、どこに行ったのかしら？」

和泉が一旦廊下に出ると、学食の方にいたらしく、手招きした。

「村正君！ うろちょろしない！ こっち来なさい！」

「この大学の学食って美味しそうっすね」

そうつぶやきながら入ってきた村正悠也の姿に、愛佳、琴音、菜月の三人は愕然とす

る。

身長は高くも低くもなく引き締まった体つきをしている。女子としては背が高い菜月と同じくらいか。

顔立ちもなかなかのイケメン。だが、髪はろくにセットされた様子がなく、寝癖がついている。スーツはもちろん、シャツもアイロンがかかっておらずシワだらけだ。

一見すると就活で連敗中の男子学生という感じで、左襟のやたらと輝く弁護士バッジが偽物っぽく見えてしまう。

和泉がため息混じりに口を開く。

「紹介するわ。村正悠也君。予備試験組の……そうね……ゆ、優秀な新人弁護士よ」

「うわっ。サンタコスプレ？ クリスマスパティーやってたの？ いいな。俺も参加していい？」

村正が開口一番そう言うので、愛佳たちは一様に眉をひそめた。

村正は、楯田テールの方に視線を転じる。

「あれ？ もしかしてケーキ？」

「村正君！ ちゃんと挨拶しなさい！」

和泉の叱責によりやく村正は片手を上げて、

「村正っす。よろしく」

と言っただけだった。

あまりの衝撃に、愛佳たちは挨拶を返すことができなかった。

「そういうわけで……彼が、今日からセンターの顧問になるから、よろしくね……」

和泉が苦笑いしながら廊下に出たのを愛佳、琴音、菜月の三人はすぐに追いかけた。

「和泉先輩、待つてください。本当に顧問を辞めちゃうんですか？」

「和泉先輩がいなくなるなんて、寂しすぎます……」

「まだ色々と教えていたきたいのに……」

和泉は立ち止まると、まず、菜月を見つめた。

「菜月ちゃん、教えるべきことはすべて教えたわ。あとは自分で考えて行動するの」

次に琴音に歩み寄ると頬にこぼれた涙をそっと拭いてやる。

「琴音ちゃん、そんなに泣かないで。私は遠くに行っちゃうわけじゃないのよ」

最後に愛佳の肩に手を置く。

「これからは、愛佳ちゃん。あなたが部長として責任を持って相談者と向き合っのよ。いいわね」

「和泉先輩……」

愛佳は顔を曇らせながら和泉を見上げる。

——私一人で相談者と向き合えるのだろうか。

途方もない不安が押し寄せた。

「それから、今日から私のことを先輩と呼ぶのは止めてね。私は、天羽法律事務所の所長代行なのよ」

「は、はい……。和泉先生！」

「あなたは私の教え子、直弟子よ。予備試験に合格したんでしょ。あなたならやれるわ」
和泉に肩をぽんぽんと叩かれた時、愛佳は心の奥底でマツチの火ほどの小さな闘志が沸き立ったような気がした。そして、和泉が手を振って立ち去る姿を見送った時には、愛佳の顔には決然とした意志が宿っていたのだった。

さて、三人がセンターの部屋に戻ると大事件が起きていた。

真っ先に悲鳴を上げたのは琴音だった。

「な、何をなさってるんですか！」

悲鳴の先には村正の姿があった。

村正は、ケーキの箱を開けただけでなく、トレイを引き出していた。

それだけならともかく……。

1ピース5000円のケーキが床に無惨にこぼれ落ちて砕けていたのだ。それも、4ピース全てである。

「俺のせいじゃねえぞ！ この箱の開け方がややこしいのが悪いんだ！」

「てめえ！ ふざけてるのか！」

「あんたねえ……！ こんな顧問、ありえない！」

こうして紫雲女子大学消費者センターの顧問弁護士村正悠也は、初日から三人の鉄拳制裁を受けることになったのだ。

この事件は『クリスマスの惨劇』として後々まで村正が三人から恨まれ続けるきつかけとなった。

そして、惨劇から約2週間後――。

紫雲女子大学消費生活センターの仕事始めの日。

センターの部屋に入ってきた愛佳を見て、琴音と菜月が揃って目を丸くした。

「あけましておめでとうございます……愛佳ちゃん、その姿はどうなされたの？」

「就活は来年だろ？」

愛佳は濃紺のリクルートスーツを身に纏っていた。

鏡で確かめたら、まだ初々しさが漂い、板についていないのは、愛佳自身も分かってい
る。それでも、私がこのサークルの部長だ、と愛佳は自分に言い聞かせる。

「二人とも、今年もよろしく。今日から、私達だけで、相談者と向き合っていかなければ
ならないんだから。和泉先生がいなくなつて、しっかりやるわよ！」

愛佳が決然と言うと、琴音と菜月にも伝わつたらしく、二人とも、いつになく目を
輝かせた。

「そうですわね。しっかりやりましょう」

「気合い入れていくか」

愛佳が差し出した手に、琴音と菜月も手を重ねた。

「新生、紫雲女子大学消費者センター発足よ！」

愛佳たち三人が高く手を挙げたとき、村正だけは、部屋の片隅に椅子を三脚並べていび
きをかいていたのだった。